

との交渉を望み、彼が決起すれば協定締結のためにベオグラードに出かけていってもよいとさえ述べた⁸⁰。

11月29日付けの返信でダヴィドヴィッチはこう告げた。クロアチア・ブロックが主張する前提条件はすべて原則的に承認する。その上で、これらの条件についてもっと議論をしてよい。しかし、いま何よりも必要なのは、クロアチア・ブロックの議員が議会に姿を現し、新しい政局の流れを創り出し、政権を崩壊に追い込むことである。必要なのは相互の信頼である。これはいかなる協定書よりも確実な保証となる。クロアチア・ブロックが議会に参加し、政党勢力の新しい組み合わせが可能にならなければ、民主党を分裂させることができない。さらにダヴィドヴィッチの使者は口頭で彼の要請を伝えた。12月2日にはクロアチア・ブロックは議会に来てもらいたい。そうしないと時宜を失ってしまう。クロアチア・ブロックがいつまでも議会の欠席を続けていると、プリビーチェヴィッチ派は力を増し、現在の連立政権はそれだけ基盤を固めてしまう⁸¹。

11月30日のクロアチア・ブロック中央委員会の席上、ラディッチはダヴィドヴィッチの返信を読み上げ、メンバーの意見を問うた。かねてから議会への復帰を望んでいたクロアチア同盟幹部のマテ・ドリニコヴィッチは、クロアチア・ブロックが提示した条件を承認するとダヴィドヴィッチが述べている点を評価し、ベオグラード行きに前向きな態度を示した。しかし、中央委員会のメンバーの大半は、ダヴィドヴィッチの手紙での求めに応じていきなりベオグラードに行くことには消極的であった。最高指導者のラディッチも大いに迷い、即座に決定できない様子であったという。クロアチア・ブロックが提示した条件をダヴィドヴィッチが受け入れ、協定を結ぶ用意を示していることをラディッチも評価していた。しかし、ラディッチは、セルビアの政治指導者と一度も会談を開くことなく、クロアチア・ブロックの議員をベオグラードに派遣することに不安を抱いていた。ダヴィドヴィッチの手紙の文面からは、クロアチア・ブロックが提示した前提条件を実行する手順と方法で共通の立場に立てるかどうかが不明

であったからである。結局、12月1日、ラディッチはダヴィドヴィッチの要請を丁重に断る手紙を書いた⁸²。

12月3日、クロアチア・ブロックを代表してドリニコヴィッチ（クロアチア同盟幹部）がラディッチの返信をベオグラードに持って行った。彼は、ダヴィドヴィッチ、プロティッチ、その他の野党指導者と面会し、事情を説明した。民主党ダヴィドヴィッチ派のメンバーは、なぜクロアチア・ブロックがこれほど慎重な態度をとるのか理解できなかった⁸³。しかし、ラディッチはあくまで冒険を犯す気はなかった。彼は、現在の政権が崩壊し、これに代わってクロアチア問題の解決に真剣に取り組む政権が現れるという確証を得るまでは議会の欠席を続けることを考えていた。12月2日開催のクロアチア・ブロック指導部の会議でラディッチは、「すべて事前に話し合いが付かない限り、ベオグラードに行くことはできない」という立場を強調した。クロアチア・ブロックは、なんとといっても、欠席戦術をとることによってクロアチア人民衆から大きな支持を獲得していた。連立政権を構成している急進党と民主党は対立が深まり、クロアチア・ブロックは相対的に有利な政治的立場にあった。このような状況下で、うかつに欠席戦術を放棄してベオグラードの議会に参加し、期待した成果が得られない結果になることをラディッチは何よりも恐れた。いずれにせよ、クロアチア共和農民党は新興政党であり、拙速な戦術によってせっかく獲得したクロアチア人民衆の支持を失うことになることは避けたかった。次の国政選挙は間近に迫っていたからである。

6 急進党－民主党連立政権の崩壊

政権打倒のために民主党ダヴィドヴィッチ派がクロアチア・ブロックと交渉をおこなっていることは、急進党にとっては不愉快極まりないことであった。しかしながら、これによって民主党内の路線対立が深刻化し、政党としての統率力が弱まっていることは歓迎すべきことであった。それゆ

え、急進党は、ライバル政党の内部対立をもっと深めようとした。中央集権制システムを守るために強権的政策を継続しようとする民主党プリビーチェヴィッチ派は、ダヴィドヴィッチ派との対抗上、急進党との連携を深めざるをえない立場にあった。パシッチら急進党指導部は、この機会にプリビーチェヴィッチ派を急進党により強固に取り込んで民主党を分裂に追い込もうとした。その意図がはっきりと現れたのは国民議会議長選挙であった。

10月20日、国民議会の新会期の開会に際し、議長の改選が予定されていた。急進党と民主党の連立協定によれば、首相ポストは急進党が獲得する代わりに国民議会の議長は民主党から出すことになっていた。国民議会の議長は、この国の慣例により、内閣が辞職した際に後継の首相を国王に推薦する重要なポストである。

現職の議長はクロアチア人議員のイワン・リバルであった。しかし、急進党の議員クラブはリバルの再選に強く反対した。リバルは、議長の地位にありながら9月のザグレブの知識人大会に参加し、ダヴィドヴィッチ路線の支持を鮮明にしていたためである。急進党議員の多くはこの機会に民主党との連立を解消することを求めたが、党首のパシッチは、「憲法に忠実な人物」を条件に民主党から議長を出すことに同意した。これは民主党の分裂をねらった策であった。急進党と民主党は代表を出して意見調整をおこなったが、両党は候補者を一本化できなかった。結局、民主党は妥協的解決として二人の候補を立て、自由投票で決めるという提案をした。一人はダヴィドヴィッチ派のリバルであり、もう一人はプリビーチェヴィッチ派のスロヴェニア人議員エド・ルキニッチであった。この案は急進党も受け入れた。多数派の形成に自信があったからである。議会での投票（総数225）の結果は、ルキニッチが124票、リバルは88票であり、予想通り急進党議員の支持を得たルキニッチがリバルを破って当選した⁸⁴。

パシッチの思惑通り、議長選挙は民主党の内紛を促進した。だが、パ

シッチと急進党にとって、喜ばしい事態ばかりではなかった。1920年11月の憲法制定議会選挙以来、ベオグラードを中心とする中央集権的な政治体制は、連立のパートナーである民主党が一体となって政権に協力することで支えられていた。たとえば、議会での法案の成立には、急進党と民主党の議員全員の一致協力が得られなければ、議決に必要な得票を集めることはできなかった。したがって、パシッチらが党利党略で仕掛けた民主党に対する分裂工作は政権運営の行き詰まりという副作用を伴っていた。急進党との結託をあからさまに示したプリビーチェヴィッチ派に対抗するため、ダヴィドヴィッチ派はパシッチ内閣打倒の意思を固め、中央集権主義の修正を求めるクロアチア・ブロックとの連携をこれまで以上の決意で模索することになったからである。

ダヴィドヴィッチ派は二つの方法でパシッチの政権運営を妨害した。一つは民主党閣僚を利用した倒閣運動である。二人の議長候補者を出すことを決めた民主党議員クラブ総会で、ダヴィドヴィッチ派は重要な提案を採択することに成功していた。それは10月23日のクマノヴォの戦いの記念式典の後、内閣に総辞職を求め、急進党がこれに応じない場合には、民主党の閣僚は率先して辞表を提出するというものであった。しかし、プリビーチェヴィッチ派が多数を占めていた民主党の閣僚は、内外情勢の緊迫化を理由に政権の継続を主張し、辞表の提出を拒否した。これに対して、党首のダヴィドヴィッチは、議会により強い支持基盤をもった新しい政権を樹立するために、現政権はいったん辞職しなければならないと主張し、民主党の閣僚に党の機関決定の遵守を求めた。両派の論争は激化し、民主党は再び分裂の危機に陥った。しかし、この争いは、ダヴィドヴィッチ派が要求を取り下げることで和解が成立し、民主党の分裂は回避された。その背景には、クロアチア・ブロックとの交渉の進展があった。ラディッチが懸念するように、内閣の辞職に伴って議会の解散がおこなわれれば、クロアチア・ブロックが議会に来る可能性がなくなってしまうからであった⁸⁵。

もう一つは、政府提出法案に対する修正要求である。1922年11月初め、

パシッチ政府は三つの重要法案の採択をめざしていた。その一つは「国家公務員法」であったが、ダヴィドヴィッチ派の民主党議員は、憲法の基本原則に対する違反を理由に法案の一部に修正を要求した。最大の争点となったのは、「国家公務員であることができない者」の中に含まれていた「国家形態の変更を主張する思想信条を公然と吹聴する者」という条文であった。これは、共産主義者のほか、君主制に反対するクロアチア共和農民党の支持者を国家公務員から排除することを意図していた⁸⁶。しかも、この条文は、プリビーチェヴィッチの強い要求によって法案に追加されたものであった。だが、それだけにクロアチア・ブロックとの交渉を成功させたいダヴィドヴィッチ派にとっては、どうしても承認できないものであった。プリビーチェヴィッチ派の民主党議員の主張によれば、この条文の挿入について、民主党の議員クラブは事前に了承の決定を出しており、民主党の全議員はこれにしたがう義務を負っているはずであった。だが、ダヴィドヴィッチ派の民主党議員は、これを「時代錯誤的で反動的な規定」と非難して、法案のテキストに含めることに強く反対した⁸⁷。彼らがこのような態度をとったため、政府は法案の議会への上程を延期せざるをえなかった。法案の採択に必要な賛成票の確保が見込めなかったからである。同様に、残りの二つの法案（「戦争傷痍者補償法」と「農業者への融資に関する法」）の上程も延期され、国民生活に重大な影響を与えた。

11月末、ダヴィドヴィッチ派とクロアチア・ブロックとの交渉が山場を迎えていたとき、急進党とプリビーチェヴィッチ派は決定的な反撃を始めた。11月28日の急進党議員クラブの会合でパシッチは、セルビアの反政府勢力との協定に意欲を示したクロアチア・ブロックの声明を読み上げ、ダヴィドヴィッチ派とクロアチア・ブロックとの交渉によって民主党との政権協力は不可能になったと結論づけた⁸⁸。12月2日、急進党議員クラブは、パシッチの状況分析に基づいて、現内閣を総辞職させる決定をおこなった。12月3日の閣議でパシッチは急進党の決定を閣僚に伝えた⁸⁹。12月4日、連立内閣は総辞職した⁹⁰。

内閣の総辞職を決めたパシッチは二つの意図をもっていた。一つは、何よりもダヴィドヴィッチとクロアチア・ブロックとの交渉を挫折させることであった。もう一つは、政治危機の責任をすべて民主党ダヴィドヴィッチ派に押し付けることであった。これによって、民主党を弱体化させ、あわよくば分裂に追い込んで、ライバルの政治集団を政権から排斥することをパシッチはねらった。他方、プリビーチェヴィッチ派にとって、民主党を権力から排除しようとするパシッチの策謀は大きな脅威であった。しかし、彼らは、むしろ急進党からの威嚇を利用して派閥抗争を有利に闘おうとした。政権の座から退くことは民主党の議員全員にとって大きな痛手であり、議員クラブの議論でこの危険性を提起することによって、ダヴィドヴィッチ派の責任を追及すると共に、両派のどちらに味方するかを決めかね、日和見主義的な態度をとっている議員を自陣営に引きつけようと彼らは考えた。

12月5日、プリビーチェヴィッチ派議員8名の要求により、民主党議員クラブの総会が急遽招集された。閣僚の一人であったプリビーチェヴィッチは、内閣辞職の理由について、「連立政権を構成する一部のグループが、政権打倒を企図して反政府諸勢力と交渉をおこなった」という急進党側の見解を論評することなくそのまま述べた。このあと、プリビーチェヴィッチ派とダヴィドヴィッチ派の間で議論の応酬が始まった。プリビーチェヴィッチはダヴィドヴィッチの行動を容赦なく批判し、こう述べた。ヴィードヴダン憲法を支持する立場をとらない政党とダヴィドヴィッチが話し合いをおこなったのは党首の職責に反する行動だ。クロアチア・ブロックとの協定は憲法修正なしには成立しないのだから、彼らとは話し合うことはできないはずだ。続けてプリビーチェヴィッチは、クロアチア・ブロックのような「反国家分子」が入閣するような政権の形成には断固として反対すると述べた。ヴェツェスラフ・ヴィルダーは、政権打倒をねらったダヴィドヴィッチの行動は民主党の基盤と理念を揺るがせたと述べた。彼の見解によれば、民主党は、党を創設し強化することによってクロ

アチア問題を解決しようとしてきたのに、現在の党は自身を弱体化させることによってクロアチア問題を解決しようとしているとのことであった。プリビーチェヴィッチは、会議に参加していた議員に向けて、こう強調した。政権の危機の決着に民主党が積極的に関わることを望むならば、この議員クラブの決議は明瞭明快でなければならない。その決議からダヴィドヴィッチ派の策謀の継続が疑われるようであれば、民主党は新しい政府に参加できなくなるだろう⁹¹。

これに対して、ダヴィドヴィッチ派の反論は控えめであった。彼らは、もっぱら釈明に努め、ダヴィドヴィッチの行動は党の決議や綱領を逸脱していないことを明らかにしようとした。たとえば、パヴレ・アンジェリッチは、クロアチア・ブロックとの交渉は自分のイニシアチブでおこなった行動であり、ダヴィドヴィッチに責任はないことを強調した⁹²。ダヴィドヴィッチ自身もこう弁明した。クロアチア・ブロックの指導部とはこれまで対話を試みてきただけであって、交渉をしてきたわけではない。これは10月12日の党決議で党首に認められた権限に基づいてとった行動だ。この話し合いの中で彼の側からは憲法の修正を提起したことは一度もない。また政権打倒を無条件に提案したこともない。ただ現在の連立政権に代わりうる、より多くの政党が参加する挙国一致政権の可能性について話し合っただけだ。注目すべきは、ダヴィドヴィッチ派が、彼らの行動は党の利益にかなっていないことを強調した点である。そこには、クロアチアのセルビア人を主要なメンバーとするプリビーチェヴィッチ派と、旧セルビア王国内で急進党と選挙の地盤が競合するダヴィドヴィッチ派の考え方の相違が鮮明に表れていた。ダヴィドヴィッチ派はこう主張した。民主党は、急進党の補完勢力の地位に甘んじていることはできない。急進党以外の政党との協力関係を別の選択肢としてもっておくことが必要である。ところが、民主党は、クロアチア政策で急進党の支持を得るために、あらゆる地域で急進党に追随する政党になってしまった。しかしながら、セルビアにおける民主党の躍進は、急進党との政策上の相違を世論に提起することによつ

て初めて可能となる。民主党は、急進党に対する過度の密着・依存関係から抜け出すことが喫緊に求められている⁹³。

民主党の議員クラブの議論は、12月7日に党決議を採択して結末を迎えることになった。6人の委員が選ばれ、彼らは次のような内容の決議案を作成した。1. 民主党党首のリュバ・ダヴィドヴィッチは、党機関に通知しその承認を受けることなく、自らの判断により、様々な政治集団の指導者と話し合いをおこなった。この中にはクロアチア・ブロックとの話し合いが含まれる。2. ダヴィドヴィッチは党の綱領に一度も背く行動はとらず、これらの話し合いの中ではヴィードヴダン憲法の修正は一度も話題にならなかった。この話し合いはすでに打ち切られている。3. 内閣の辞職後の新しい政局においては、1921年10月30日の党決議の精神に則って、民主党は、ヴィードヴダン憲法を擁護する立場に立つ議会主義的な政治勢力とのみ交渉をおこなう。この決議案に目を通したダヴィドヴィッチはその内容に驚き、党と議員クラブに辞表を提出した。決議案はプリビーチェヴィッチ派の主張のみが大きく取り入れられており、ダヴィドヴィッチはこれをとって承伏できなかつたからである。この決議案はただちに民主党議員クラブの採決にかけられた。投票の結果は、賛成42、反対30、保留4であり、決議案は採択された。政権喪失の危機を党所属議員に訴えたプリビーチェヴィッチ派の戦術はひとまず成功を収めたのである⁹⁴。

12月8日、民主党議員クラブは、連立政権に引き続き参画するための協議を続けた。彼らは、前日に採択された決議に沿って、政権の危機を解決するためとして、次のような方針を作成した。1. 憲法修正を容認する傾向をもたない政党と連立政権を構成する。2. 連立政権に参加する政党には、ヴィードヴダン憲法を擁護しない立場に立つ政党とは交渉をおこなわないことを義務づける。3. もっとも緊急に成立が求められている法律（戦争傷痍者補償法、国家公務員法、農業者融資法）を議会で成立させる。この決定は投票をせずに採択された。ダヴィドヴィッチ派の議員は沈黙していた。民主党はこれによって表面的に党の結束を維持し、民主党が新し

い政府に入る資格のある政党であることを急進党に示したつもりであった。急進党との連立協議のための委員が選ばれ、辞任を表明した党首のダヴィドヴィッチに代わって副党首のアンドリア・ラドヴィッチがその代表を務めることになった⁹⁵。

急進党にとって、民主党がおこなった路線対立の決着はけっして満足できるものではなかった。彼らは、できればこの機会に民主党が分裂してくれることを期待していたからである。12月8日の急進党の議員クラブの会合では、民主党に対して不満が噴出した。彼らの眼には、12月7日の民主党議員クラブでの採決の結果は、正反対の政策を主張するグループが民主党内にほぼ勢力を拮抗して存在することを示しているだけのように見えた。パシッチもこう非難した。このような決着の仕方では民主党が本当に信頼の置けるパートナーなのか確信がもてない。批判を加えたグループと一緒にいるということは、時間がたてば彼らはまた同じことを繰り返すのではないか⁹⁶。

内閣総辞職のあと、パシッチは国王から再び組閣の任を受けた。国王の当初の意向は連立政権の形成であった。民主党も連立政権に積極的に協力する意思を示した。ところが、12月12日、パシッチは民主党との連立の意思がないことを国王に伝え、首班指名を返上した。パシッチの主張は、民主党の分裂を前提にプリビーチェヴィッチ派のみを政権に受け入れることであった。国王は再びパシッチを首相に指名した。12月13日、急進党と民主党の議員クラブは合同会議を開いた。民主党のラドヴィッチとプリビーチェヴィッチは、民主党全体が連立政権に協力の意思があることを強調して、パシッチの説得に努めた。しかし、急進党議員クラブの代表は民主党には政権協力の可能性がないと述べて政権参加を拒否し、受け入れるとすればプリビーチェヴィッチ派のみであることを主張した⁹⁷。

1922年12月16日、パシッチは急進党単独政権を発足させた。それは選挙管理内閣であり、議会を解散し、総選挙を告示する許可を国王から得ていた。投票日は1923年3月18日と定められた。したがって、急進党は3ヶ月

間もの間、議会と対峙することなく政権を担当することになった。民主党は声明を発表し、このような単独政権の樹立はこれまで築き上げてきた「国家創造戦線」の破壊を意味し、その結果の責任は急進党が負うことになると述べた⁹⁸。

パシッチとプリビーチェヴィッチは水面下で政権協議をしていたが、それは実を結ばなかった。プリビーチェヴィッチ派は、パシッチらが求めていたように党を割って、急進党政権に加わることをしなかった。その背景にはいくつかの原因が指摘されている。第一に条件面で折り合えなかった。プリビーチェヴィッチ派にとって、選挙を控えて民主党からの離脱を決断するためには、そのデメリットを十分にカバーするような好条件の提示が必要であった。たとえば、閣僚ポストとその数である。ところが、急進党指導部はあれだけプリビーチェヴィッチ派の政権への受け入れを表明していたにもかかわらず、プリビーチェヴィッチ派が納得するような条件を提示しなかった⁹⁹。私見であるが、この内閣は暫定的な選挙管理内閣であり、議会は解散されたので、法案を可決するために多数派を形成することも必要でなかった。したがって、急進党としては単独政権でもとくに不都合はなく、あえて好条件を提示してプリビーチェヴィッチ派に政権参加を求める必要もなかった。プリビーチェヴィッチはこのような急進党の態度を察知し、自らのグループを安売りするような選択には踏み切れなかったと考えられる。

第二に、より重要な要因として、急進党の指導部は本音の部分ではプリビーチェヴィッチ派を政権に受け入れない方が得策だと考えていたことである。その理由として、一つには、パシッチらは、民主党ダヴィドヴィッチ派とクロアチア・ブロックとの交渉を厳しく批判していながらも、実際にはラディッチとの交渉の可能性を排除していなかったことがある。その証左は、急進党の元幹部ストヤン・プロティッチとラディッチとの交渉をパシッチらは一度も批判したことがなく、むしろこれを急進党の別働隊のごとく容認してきたことである。杓子定規な原則主義者のプリビーチェ

ヴィッチとは違って、パシッチを始めセルビアの指導者はみな柔軟なリアリストであった。クロアチア・ブロックはクロアチアで絶大な支持を得ている勢力であり、国政の安定のためには弾圧するよりも懐柔する方が得策であった。したがって、ダヴィドヴィッチがそう考えたように、条件を整えば彼らと手を結んでもよいとパシッチは考えていた。その場合、中央集権主義と反クロアチア政策の急先鋒であるプリビーチェヴィッチ派の存在は、クロアチア・ブロックとの交渉の障害となることは必定であった。もう一つは、急進党内には、プリビーチェヴィッチを不倶戴天の敵とする実力者プロティッチの支持者がかなりいたことである。したがって、プリビーチェヴィッチ派の政権への受け入れはこれらのグループの反発を招き、急進党の結束を揺るがせる恐れがあった¹⁰⁰。

しかしながら、連立政権の崩壊に決定的な役割を果たしたのは国王アレクサンダルであった。急進党のパシッチが民主党との連立政権を拒否して首班指名を返上したとき、国民議会議長のエド・ルキニッチは、慣例により、首相候補者を国王に推薦するために宮廷に出向いた。ルキニッチは、連立政権維持の見地から、パシッチがどうしても考えを変えない場合には、民主党のダヴィドヴィッチの首班指名を国王に助言した。国王は、不文律として、国民議会議長の推薦を受け入れなければならなかった。その場合には、民主党が主導権を握る連立政権が誕生し、政局は大きく変わっていたはずであった。ところが、アレクサンダルはあえて急進党単独政権の形成を容認し、再びパシッチを首相に指名した。この裁定を不審に思ったダヴィドヴィッチがアレクサンダルに謁見し、その理由を聞いたところ、彼は、パシッチの首班指名はルキニッチの助言にしたがっただけだと述べた。これは事実と反していた。ルキニッチは国王が自分の説明に納得し、連立政権は維持されるという見通しを盟友のプリビーチェヴィッチに伝えていたからである。

1922年末の政治危機に際してアレクサンダルがとった態度は、ダヴィドヴィッチ派の計画に対する国王としての意思を示していた。それは、君主

制に反対する政治勢力と手を結ぼうとする民主党ダヴィドヴィッチ派の行動に対する拒絶を意味していた。アレクサンダルがルキニッチの助言にしたがって、ダヴィドヴィッチを首相に指名した場合、ラディッチとの交渉は一気に進展し、クロアチア・ブロック所属の議員がベオグラードに到来し、新しい政治の流れが形成される可能性が大きかった。しかし、アレクサンダルは、ヴィードヴダン憲法に基づく国家秩序をクロアチア・ブロックが承認しない限り、彼らの議会への参加を認める気はないことをすでに明らかにしていた。したがって、国王は急進党単独政権の形成を容認することによって、ダヴィドヴィッチ派の計画を挫き、クロアチア・ブロックの来訪を阻止しようとした。国王が、あえて虚言を口にして、プリビージェヴィッチ派とダヴィドヴィッチ派の反目を深めようとしたのも、パシッチの見地を採用し、民主党を弱体化させるためであったと考えられる¹⁰¹。

7 ヴィードヴダン憲法体制の基本問題

ヴィードヴダン憲法は、1918年12月1日の国家統合以来、ベオグラード政府が半ば強権的に築き上げ、既成事実にしてきた国家制度を二つの側面で強化した。一つは君主制の政体であり、もう一つは中央集権制である。

第一の点については、ヴィードヴダン憲法の総則は、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の国家は憲法に基づいて議院内閣制をとる君主制国家であることを述べる。正式な国家の名称は「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」である。この憲法によれば国家のもっとも重要なファクターは国王であり、国王は立法・行政・司法の各分野において最高権力を有する。立法権は国王と国民議会が行使するが、憲法の規定は国王の権限が議会の決定に優先することを定める。国民議会が可決した法律は国王がこれに署名し、公布することによって初めて効力をもつ。国王が署名を拒否すればその法律は効力をもたない。したがって、議会が可

決した法律に対して国王は拒否権を有する。また国王は国民議会を召集および解散する権限をもち、場合によっては国民議会の機能を停止する権限さえもつ。国王は行政機構の頂点に立ち、内閣の閣僚および最上級の国家公務員は国王が任命する。内閣閣僚は国王に対して責任を負うが、国王自身はいかなる政治的責任も負わない。国王は対外的に国家を代表し、外国との条約を締結し、批准する。国王はまた外交関係を打ち切り、戦争を宣言し、講和条約を結ぶ権限をもつ。最後に司法面では、最高裁判所の判決は国王の勅令によって執行される。

第二の点については、ヴィードヴダン憲法の制定によって、地方政府が完全に廃止されることになったことが重要である。南スラヴ人王国は、セルビア王国と旧オーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人諸地域が合併して出来上がった国家であり、統一国家の発足時、ポクライナ (pokrajna) と呼ばれた旧オーストリア＝ハンガリー領の地域には地方行政府が残っていた。スロヴェニア、クロアチアおよびスラヴォニア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナといった地域はみなポクライナである。オーストリア＝ハンガリー帝国はこれらの地方政府に地方議会とワンセットで一定の自治権を認めてきた。これに対して、ベオグラードの中央政府は、地方議会の機能の停止、地方政府の首長の国王による任命制への変更、地方政府の行政部門の縮小、中央政府が制定する政令による法令の一元化などの措置を矢継ぎ早に出して、地方政府を中央政府の統制下に置いてきた。しかし、地方政府の組織自体はなお存続していた。したがって、ヴィードヴダン憲法はその条文の中にポクライナと地方政府の存在を認めないことで、国家の中央集権化を完成させたのである。

ヴィードヴダン憲法は国家の内部に四つのレベルの行政単位を設定する。それは規模の順に述べると、州 (oblast)、県 (okrug)、郡 (srez)、町村 (opcina) である。このうち最大の行政単位である州の特徴は、旧来の地域単位であるポクライナに比べて規模がずっと小さいことである。憲法には細かな行政単位の区分は記されていないが、これを補うべく1922年

4月に成立した法律は、国家を33の州に分割することを予定していた。この結果、従来のクロアチアの二つのポクライナ（クロアチアおよびスラヴォニアとダルマチア）は6つの州に分割されることになった。もともと、ヴィードヴダン憲法は地方分権を完全には否定していなかった。州には議会を設け、法律に抵触しない限りで一定の自由裁量を認めていた。ただし、州の長官である知事は国王が任命し、州の行政機構は中央政府の統制下に置かれた。つまり、ヴィードヴダン憲法は、行政単位を細分化することで地方に対する中央の統制をより徹底しようとしたのである。

しかし、以上の措置は大きな問題をはらんでいた。第一にヴィードヴダン憲法は国王に対し、議会に優越し、絶対的ともいうべき大きな権限を認めていることである。これはこの国の憲法の歴史からみて反動的な側面があった。というのは、ヴィードヴダン憲法の原型となった1903年制定のセルビア憲法はベルギー国憲法（1831年）を手本とし、西欧的な自由主義と民主主義を基礎原理とし、その上に君主制を認めようとしていたからである。このことの背景には、前の支配者であったオブレノヴィッチ王朝が悪名高い独裁政治をおこない、これがクーデターによってようやく打破された直後であったので、当時のセルビアの政党指導者は何よりも自由主義的議会民主制の確立を欲したことがあった。ところが、このたびの憲法制定過程では、セルビア人を中心とする与党の政治指導者は、共産党やクロアチア共和農民党などの反政府政党が民衆の支持を得て勢力を伸ばすことを恐れて、議会の権限を制限して国王に絶対的な権限を付与するような憲法を作成した。このことは政党政治にとって自殺行為であった。数年後に国王はこの権限によって自ら独裁政治を宣言し、議会政治を終焉させることになったからである。

第二にその審議と採決の過程からも明らかなように、ヴィードヴダン憲法はどうみてもユーゴスラヴィア国民の総意を反映した憲法とはいえなかったことである。1920年11月の憲法制定議会選挙の結果は、国家統合後の中央集権主義政策に対する国民の根強い不満を示していた。それにもか

かわらず、政府は、審議の過程ではクロアチア人やスロヴェニア人政党が出していた地方政府と自治権の復活の提案にはいっさい耳を貸さなかった。採決の過程では、政府は、クロアチア共和農民党を始め反対勢力による議会のボイコットに助けられ、かつスロヴェニア農業者党やムスリム人政党を政治的に買収することによってかろうじて過半数の賛成を確保し、この憲法を可決させた。この憲法は大多数のクロアチア人やスロヴェニア人の政治家に受け入れられなかったばかりでなく、ストヤン・プロティッチのようにセルビアの有力な政治指導者の中にもこれに反対していた者がいた。

したがって、ヴィードヴダン憲法が制定されてからわずか一年後に憲法修正がセルビア人とクロアチア人の政治家の間で政治的駆け引きの材料となったのは不思議なことではない。民主党党首のリュバ・ダヴィドヴィッチがステパン・ラディッチ率いるクロアチア・ブロックと政治的連携を模索した1922年の後半は、ユーゴスラヴィア国民の大きな不満を背景にセルビア人とクロアチア人の政治指導者が妥協点を求めて対話を開始した時期であった。しかしながら、1922年という年は、セルビア人とクロアチア人の交渉が本格的に進展するにはいささか早すぎたようである。いくつかの理由を指摘しておきたい。

第一にセルビアの政治指導者の中ではクロアチア・ブロックに対するアレルギーがまだ根強かったことである。たしかに暴力革命を否定し平和主義を標榜するクロアチア共和農民党は、ソ連を模範とする共産党ほど脅威を与える存在ではないことはセルビアの政治家に知られるようになっていた。そうであるからこそ、ラディッチに対してダヴィドヴィッチやプロティッチといったセルビア人の政治指導者は交渉の意思を示したのである。しかし、彼らはまだマイノリティであり、この時点では、セルビアの多くの政治指導者にとって、共和主義者のラディッチと手を組むなどということはきわめて大きな冒険に見えた。国王を中心とする宮廷の勢力も同様の警戒感が強かった。それゆえ、民主党の路線を決定した1922年12月の

議員クラブ総会では、ダヴィドヴィッチに近い議員でさえ、プリビーチェヴィッチ派の用意した決議案に賛成票を投じたのである。

第二にラディッチの政党がちょうど成長途上であったことである。たしかにクロアチア大衆農民党は1921年11月の選挙で50議席を獲得して勝利を収めた。しかし、このとき彼らはクロアチアおよびスラヴォニアの選挙区に候補者を擁立しただけであって、他のクロアチア人の居住区であるダルマチアやボスニア・ヘルツェゴヴィナの選挙区には候補者名簿を提出していなかった。それゆえ、クロアチア共和農民党はさらなる党勢の拡大を期してダルマチアとボスニア・ヘルツェゴヴィナのクロアチア人を組織化し、党の綱領と政策を浸透させようとしていたが、その成果が得票と議席の形で現れるのは次回の選挙を待たなければならなかった。ラディッチ自身も党勢の拡大に大いに自信を持っており、民主党のダヴィドヴィッチの要請を断ったのもこの時点で反政府の姿勢を転換するのは得策ではないという判断が最終的には勝ったのではないかと考えられる。

第三にこの時期のラディッチは、スロヴェニア人およびボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム人との連携が不十分であったことである。スロヴェニア人の政党指導者はこの時期、クロアチアの自治権の樹立のみを視野に置くクロアチア・ブロックの綱領は支持できないものであったし、議会外での活動に重点を置く戦術には否定的であった。ボスニア・ムスリム人の政党、たとえばユーゴスラヴィア・ムスリム組織に対しては、ラディッチはまったくの接触がなかった。しかし、スロヴェニア人やボスニア・ヘルツェゴヴィナのムスリム人はポクライナや自治権の復活などの共通する利害があった。クロアチア人の人口は全体の23%であり、これに対してセルビア人の人口は全体の43%であった。したがって、いくらクロアチア人の組織化を進めても単独ではセルビア人の勢力に対抗していくことには無理があった。いいかえると、スロヴェニア人やボスニアのムスリム人との連携がなければクロアチア・ブロックの交渉力は限定されたものとなることは明らかであった。

以上の制約が徐々に解除されていく翌1923年は新たな緊張の段階が幕開けとなる。それは、本稿で取り上げたクロアチア問題が、ユーゴスラヴィア全体の国家制度をめぐる問題として再定義される段階である。それゆえ、ユーゴスラヴィア国家に内在する不安定要因は誰の目にも明らかになったものの、南スラヴ人の政治家にとって、問題解決のための最初の「修羅場」はまだ先に控えているといわなければならない。

注

- 1 1918年11月23日に旧オーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人の代表組織である国民評議会は「ナプタク」と呼ばれる交渉の指針を決定した。その第11条によれば、「経過期間においては、これまでの法律・法令、行政・司法制度、地方政府機関はすべて有効とする」とされていた。
- 2 Ivo Banac, *The National Question in Yugoslavia*, Cornell University Press, 1988, p.13.
- 3 イタリアは、1882年にドイツおよびオーストリア＝ハンガリーとの間で三国同盟を結んでいた。ところが、第一次世界大戦勃発後、イタリアはドイツ側に加わらず、中立を宣言した。イタリアはより有利な参戦条件を引き出すため、両陣営と交渉していたが、最終的には協商国の側に立って参戦することで合意した。その際に結ばれた秘密協定がロンドン条約であり、1915年4月26日に正式に調印された。この条約の中で、イギリス、フランス、ロシアの三国は、イタリアが協商国の側に立って参戦することと引き替えに、次の三つの条項で、オーストリア＝ハンガリーの領土を戦後にイタリアに割譲することを約束した。(1)トレンティノ、ブレンナー峠以南の南チロル地方全域、(2)トリエステ、ゴリツィア、グラディツァ、カルニオーラおよびカリニンツィアの一部、(3)北ダルマチアおよびその島嶼部。これらの地域はイタリア人が居住し、またかつてのローマ帝国の版図でもあったので、イタリア国内では「回復せられざるイタリア」と呼ばれていた。しかし、このうち(2)の地域には、50万人のスロヴェニア人とクロアチア人が、(3)の地域には50万人のクロアチア人が居住していた。
- 4 この条約ではオーストリアとの国境では、スロヴェニア人が多数居住する地域の帰属が未解決になったが、1919年10月10日、クラークンフルトの連合国委員会の監視のもと同地区の住民の意思を問う住民投票が実施された。投票の結果は、2万2025人がオーストリアに帰属の意志を示し、南スラヴ人王国に投票したのは1万5279人であった。この結果、この地域のオーストリアへの帰属が決定した。この地域はスロヴェニア人が多数を占めるにもかかわらず、住民の多くが南スラヴ人国家への参加を望まなかったわけで、このことは南スラヴ人王国政府に大きな衝撃を与えた。
- 5 パリ講和会議を実質的に指導したのは、アメリカ、イギリス、フランス、イタリアの四か国であった。このうち、イギリスとフランスはロンドン条約の当事者であり、

イタリアの要求を認めざるを得ない立場にあった。これに対して、南スラヴ人王国の立場を代弁したのは、ロンドン条約に拘束されないアメリカであった。アメリカ大統領ウィルソンは、イギリスとフランスの立場に妥協し、南チロルとトリエステならびにイストリア地方（ゴリツィア、グラディッア、カルニオーラおよびカリンツィアの一部）についてはイタリアに割譲することに合意したが、リエーカ以南のダルマチア地方については、南スラヴ人王国の主張を強く支持した。

オーストリアとのサン＝ジェルマン条約が調印された直後の1919年9月12日、イタリア人詩人のガブリオ・ダンヌンツィオは約2500人の義勇兵を率いて9月12日リエーカ（イタリア名フィウメ）に入り、フィウメ民族評議会の支持を受けて、同市の支配権の掌握を宣言した。しかし、イタリアを含めてパリ講和会議はこれを認めなかった。1920年1月21日にパリ講和会議は終結したが、南スラヴ人王国とイタリアとの国境はなお確定していなかった。連合国の側も匙を投げた格好で、両国は直接交渉で決着をはかることになった。

- 6 イタリアと南スラヴ人王国との最後の交渉は、1920年11月、ジェノヴァに近いラパロという町で始まった。交渉に先立ってイギリスとフランスは、南スラヴ人王国の代表団に対して、今回も交渉が決裂すれば、イタリアがロンドン協定によって認められた領土を獲得することを両国は容認することを伝えていた。南スラヴ人王国の強力な支援者であったアメリカのウィルソンは大統領選挙に落選して、その地位になく、国内では、ベオグラードの指導部と摂政アレクサンドルは、領土を多少犠牲にしても、国境確定交渉を早期に終結させることを求めている。他方、この年イタリアは、占領部隊を派遣していたアルバニアで現地人勢力の反撃にあって手痛い敗北を被った。国内では厭戦気分が広がり、勢力を強めた左派勢力は対外干渉に反対し、外交的要求に迫力を欠く事態に陥っていた。この結果、両国は歩み寄り、11月12日にラパロ条約は成立した。この条約によって、イタリアはトリエステ、スニエージニクからイドリアに至るイストラ半島、ザダルのほか、アドリア海のいくつかの島（クレス、ロシーニ、ラストヴォ、パラグルジャ）を獲得した代わりに、その他のダルマチア地方への要求は放棄した。またラパロ条約は、リエーカを自由都市としたが、市民はイタリア国籍を得ることが可能とした。以上、Hrvoje Matković, *Suvremena politička povijest Hrvatske, Ministarstvo unutarnjih poslova Republike Hrvatske, 1995, p.81*による。

なおイタリアとならんで大きな問題であったのは、アルバニアとの国境確定である。第一次世界大戦中、協商国は、イタリアと結んだロンドン条約の代償として、アルバニアの北部および南部を、モンテネグロ、セルビア、ギリシアが分割することを容認すると密約を与えていた。1918年9月のブルガリアの降伏のあと、オーストリア軍はアルバニア北部および中部から撤退し、フランス、セルビア、イタリア軍がこれらの地域を占領していた。パリ講和会議では、北アルバニアを新しく誕生した南スラヴ人王国に与え、ギリシアにも南アルバニアを領有させるという案をイギリスとフランスが提出したが、ウィルソン大統領は強硬に反対したためこの案は撤回され、アルバニアについては決定のないまま講和会議は終了した。その後、一度はアルバニアから撤退した南スラヴ人王国軍は1921年10月に再度北アルバニアに侵攻したが、国際連盟の大使会議は1913年のアルバニア国境を原則的に再確認する決議をおこない、南

イタリアの要求を認めざるを得ない立場にあった。これに対して、南スラヴ人王国の立場を代弁したのは、ロンドン条約に拘束されないアメリカであった。アメリカ大統領ウィルソンは、イギリスとフランスの立場に妥協し、南チロルとトリエステならびにイストリア地方（ゴリツィア、グラディツァ、カルニオーラおよびカリンツィアの一部）についてはイタリアに割譲することに合意したが、リエーカ以南のダルマチア地方については、南スラヴ人王国の主張を強く支持した。

オーストリアとのサン＝ジェルマン条約が調印された直後の1919年9月12日、イタリア人詩人のガブリオ・ダンヌンツィオは約2500人の義勇兵を率いて9月12日リエーカ（イタリア名フィウメ）に入り、フィウメ民族評議会の支持を受けて、同市の支配権の掌握を宣言した。しかし、イタリアを含めてパリ講和会議はこれを認めなかった。1920年1月21日にパリ講和会議は終結したが、南スラヴ人王国とイタリアとの国境はなお確定していなかった。連合国の側も匙を投げた格好で、両国は直接交渉で決着をはかることになった。

- 6 イタリアと南スラヴ人王国との最後の交渉は、1920年11月、ジェノヴァに近いラパロという町で始まった。交渉に先立ってイギリスとフランスは、南スラヴ人王国の代表団に対して、今回も交渉が決裂すれば、イタリアがロンドン協定によって認められた領土を獲得することを両国は容認することを伝えていた。南スラヴ人王国の強力な支援者であったアメリカのウィルソンは大統領選挙に落選して、その地位になく、国内では、ベオグラードの指導部と摂政アレクサンドルは、領土を多少犠牲にしても、国境確定交渉を早期に終結させることを求めている。他方、この年イタリアは、占領部隊を派遣していたアルバニアで現地人勢力の反撃にあって手痛い敗北を被った。国内では厭戦気分が広がり、勢力を強めた左派勢力は対外干渉に反対し、外交的要求に迫力を欠く事態に陥っていた。この結果、両国は歩み寄り、11月12日にラパロ条約は成立した。この条約によって、イタリアはトリエステ、スニエージニクからイドリアに至るイストラ半島、ザダルのほか、アドリア海のいくつかの島（クレス、ロシーニ、ラストヴォ、パラグルジャ）を獲得した代わりに、その他のダルマチア地方への要求は放棄した。またラパロ条約は、リエーカを自由都市としたが、市民はイタリア国籍を得ることが可能とした。以上、Hrvoje Matković, *Suvremena politička povijest Hrvatske, Ministarstvo unutarnjih poslova Republike Hrvatske, 1995, p.81*による。

なおイタリアとならんで大きな問題であったのは、アルバニアとの国境確定である。第一次世界大戦中、協商国は、イタリアと結んだロンドン条約の代償として、アルバニアの北部および南部を、モンテネグロ、セルビア、ギリシアが分割することを容認すると密約を与えていた。1918年9月のブルガリアの降伏のあと、オーストリア軍はアルバニア北部および中部から撤退し、フランス、セルビア、イタリア軍がこれらの地域を占領していた。パリ講和会議では、北アルバニアを新しく誕生した南スラヴ人王国に与え、ギリシアにも南アルバニアを領有させるという案をイギリスとフランスが提出したが、ウィルソン大統領は強硬に反対したためこの案は撤回され、アルバニアについては決定のないまま講和会議は終了した。その後、一度はアルバニアから撤退した南スラヴ人王国軍は1921年10月に再度北アルバニアに侵攻したが、国際連盟の大使会議は1913年のアルバニア国境を原則的に再確認する決議をおこない、南

スラヴ人王国軍は撤退を余儀なくされた。その後、1922年にアルバニアの独立は国際的認知を受け、1927年7月30日、南スラヴ人王国は、ギリシア、イギリス、フランス、イタリアと共に国境画定協定に署名した。以上、木戸翁『バルカン現代史』、山川出版社、1977年、197-200頁。

- 7 1920年2月、民主党ダヴィドヴィッチ内閣は、野党に打撃を与えるため、臨時国民議会の解散と総選挙の告示をおこなうことをめざしたが、摂政アレクサンダルは、まだ選挙の条件が整っていないとしてこれを裁可しなかった。そのため、ダヴィドヴィッチ内閣は総辞職した。
- 8 ただヴェスニッチの登場には、パリに滞在していた急進党の党首ニコラ・パシッチならびに国内にいた彼の側近の影響もあった。パシッチに代わって急進党を指導していたナンバー・ツーのストヤン・プロティッチは、この時期、自治権の回復を求めるクロアチア人やスロヴェニア人に寛容な態度を示しすぎて、急進党内で孤立していた (Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, August Cesarec Zagreb, Zagreb, 1990, p.189)。
- 9 この選挙法によると、全国55の選挙区の議員定数は、1910年の国勢調査の結果に基づき、人口3万人につき1人の議員が割り振られ、17000人を超えると1人追加された。議員定数の最大は21、最小は3である。議員総数は419人となったが、第一次世界大戦中に犠牲者の多かったセルビアはより多くの議員数が割り振られることになった。有権者は21歳以上の男子であり、これは納税額や識字能力の有無にかかわらず。女性と軍人は選挙権をもたなかった。ただし、21歳以上の男子であっても有権者となるためには投票日に6ヶ月以上その選挙区に継続して居住している必要があった、このため仕事を求めて居住地を変えることが多い貧農や労働者は選挙権を取得できないケースが予想されたが、これは共産党の支持基盤に打撃を与えることをねらったものであった。被選挙権者は、25歳以上の男子で読み書きができることが条件であった。候補者名簿には4人に1人の割合で大卒または高等専門学校卒者を入れる必要があった。ただし、閣僚と法律を専門とする大学教授を除いて国家公務員は被選挙権をもたず、裁判官も被選挙権がなかった。投票は直接の秘密投票で、議席は得票率に応じて割り振られた。この選挙法は今回の憲法議会選挙にのみ有効とされた (以上、主としてHorvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p.192による)。
なおこの選挙法のもう一つの特徴は、少数民族の一部に選挙権を認めなかったことである。それらは国際協定によって出身母国での選挙権を有する民族であり、ドイツ人、マジヤール人、ルーマニア人、イタリア人、ユダヤ人であった。これに対して、チェコ人、スロヴァキア人、ロシア人、ポーランド人、ブルガリ人、アルバニア人、トルコ人は選挙権を有した (Branislav Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, Institut savremenu istoriju, Beograd, 1979, p.70)。
- 10 投票率がとくに低かったのは、ダルマチア (56.1%)、セルビア (56.3%)、マケドニア (57.5%) であった。なお1912年のセルビア総選挙の投票率は73%であった (Ibid., p.81)。
- 11 民主党幹部は130から180議席の獲得を見込んでいた。なお総選挙の政党別の集計結果については、得票数については一致していながら、獲得議席については異説があり、

- 民主党92と急進党91の獲得議席を、民主党94、急進党89と述べる文献もある。戦後ユーゴスラヴィアの公式統計（たとえば、Jugoslavia 1918-1988 statistički godišnjak, savezni zavod za statistiku, Beograd, 1989, p.30）は後者を採用している。その理由は定かではないが、察するに選挙直後に民主党から急進党に移籍した議員がいたのではないかと考えられる。ここでは、1920年代ユーゴスラヴィアの政党政治の分析に定評のあるチュリノヴィッチ（Čulinović）、グリゴリエヴィッチ（Gligorijević）、およびホルヴァート（Horvat）にしたがって、民主党92、急進党91とした。
- 12 南スラヴ人王国の成立後、ラディッチは政治犯として大半の期間を獄中で過ごしていた。反王室的な言動を理由に最初に逮捕されたのは1919年3月21日であり、1920年2月27日まで投獄されていた。しかし、3月21日には再び逮捕され、8月4日には2年半の禁固の判決が下っていた。
- 13 クロアチア大衆農民党の躍進とは対照的に、これまでの代表的なクロアチア人政党であり、連立政権にも参加していたクロアチア同盟は4議席にとどまり、惨敗した。彼らの敗因は、農村部の住民からまったく支持されず、地盤とする都市部でも、政府に対する妥協的態度によって支持を失い、クロアチア権利党に票を奪われたことにあった。Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.86.
- 14 政府はただちに反論した。それによれば、クロアチア大衆農民党が過半数を獲得した選挙区はクロアチアの8つの選挙区のうち4つにすぎず、他の4つは別の政党が過半数を獲得していたといものであった。つまり、政府によれば、クロアチア大衆農民党はクロアチア人の過半数を代表する政党ではないということである。以上、*ibid.*, p.87による。
- 15 憲法問題で政府のブレーンを務めていたベオグラード大学の公法学教授スロボダン・ヨヴァノヴィッチは、政府の立場を代表して、こう述べている。1918年12月1日の国家統合のセレモニーの際、旧オーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人の代表組織である国民評議会は、セルビアの摂政アレクサンダルに対して、すべてのセルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人を単一の国家に統合することを求めた。その際、たしかに彼らの要請は「一つの国家」であって、「一つの王国」への統合ではなかったことは重要である。しかし、摂政アレクサンダルはその答礼において、国民評議会のシェーマを受け入れず、すべてのセルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人を「一つの王国」に統合することを強調した。このことによって、政体の問題はすでに解決している。我々の国家は1918年12月1日の建国の時点から、カラジョルジェヴィッチ王朝が君臨する君主制国家である。したがって、憲法制定議会はこれを勝手に変更することはできない。以上、Dragomir Džoić, *Federalističke teorije i hrvatska država*, Barbat, Zagreb, 1998, p.169-171、による。
- 16 憲法制定議会の規程をめぐる議論については主に以下の文献による。Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p.199、Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.89-91、Ferdo Čulinović, *Jugoslavija između dva rata 1*, izdavački zavod JAZU, Zagreb, 1961, p.312-315.
- 17 Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.91-94.たとえば、パシッチは過半数による多数決を次のごとく正当化した。すなわち、南スラヴ

- 人は単一の民族であるから憲法制定議会の議決は過半数の賛成で十分である。もし3分の2の賛成が必要になれば3分の1の勢力が拒否権をもつことになり、多数の意思が実現せず、きわめて不合理である (ibid., p.93)。
- 18 規程が採択された以上、議員資格を得るためには、すべての当選者は国王に忠誠を誓わざるをえなかった。したがって、共産党の議員でさえ、議会への参加を優先して、「強制されたもの」として戦術的に国王に忠誠を誓うことにしたのである。
- 19 委員会は42人の委員から構成され、その政党別の内訳は、急進党11、民主党11、共産党7、農業者党4、国民クラブ・ユーゴスラヴィア・クラブ4、JMO3、共和党・社会民主党2であり、急進党と民主党で過半数を確保していた (Horvat, *Politička Povijest Hrvatke* 2, p.206)。
- 20 このうち主要な案は、Horvat, *Politička Povijest Hrvatke* 2, p.201-205, Čulinović, *Jugoslavija između dva rata* 1, p.322-329によれば、以下のようであった。

政府案

政府の憲法草案は、ミレンコ・ヴェスニッチに代わって1921年1月1日に首相に就任したニコラ・パシッチが提出した。それは高度に中央集権制的な行政機構と制限された一院制の議会主義を特徴としていた。それによれば、国土は35の州に行政的に分割される。州の人口は20万人から60万人(後に80万人)までとされた。各州の行政機関は中央政府の省庁の監督下に置かれ、その行政権限は地域的な事務処理に限定される。国家権力の中心機関は、国王、国民議会、政府である。国家のすべての下位機関はこれらに従う。国王は立法・行政・司法の最高機関としてあらゆる権力機関に優れた権限をもつ。国王は国民議会を召集・解散し、法律を裁可する権限をもつ。議会は一院制の議会とする。政府閣僚は国王が任命する。政府は議会と国王に対して責任を負うが、国王に対してより多くの責任を負う。司法権力は独立の裁判所が行使するが、判決は国王の名において言い渡される。

ストヤン・プロティッチの案

前首相のプロティッチは、第一次ヴェスニッチ内閣の中で憲法制定議会の準備を担当する閣僚を務めていた。プロティッチの案は中央集権的な国家制度を基本にしていたが、政府案とは異なって、歴史的な地域区分を考慮して国土の分割をおこない、地方政府の存在を認め、法律に沿って一定範囲の自治権を認めることを特徴としていた。プロティッチ案によれば、国土は9つの州に分割される。それらは、セルビア、旧セルビアとマケドニア、スリェムおよびバチカ、バナート、モンテネグロとヘルツェゴヴィナ、クロアチアおよびスラヴォニア、ダルマチア、スロヴェニアである。各州には地方政府と地方議会を置き、州議会には一定範囲の立法権を認める。ただし州の長官は国王と中央政府の代理人として、州議会および州の行政機関の決定を差し止めることができる。国家機関は、国王、議会、政府である。国王は国家権力の中心であり、あらゆる法律は国王の署名によって裁可される。首相は国王が任命する。政府閣僚は首相の推薦に基づいて国王によって任命され、国王と議会に等しく責任を負う。議会は上院と下院の二院制とする。下院議員は普通選挙によって選出され、上院議員は各州の代表62名と各産業

の代表38名から構成される。

農業者党の案

農業者党の案は、中央主権制と議会主義にもとづく農民国家の形成を描いた。農業者党は、南スラヴ人王国の人口の大半が農民で占められることを考慮し、農民の土地所有と農業経営を基礎に社会経済的秩序を構成することを主張した。国家機構の点では政府案とほぼ同様であり、国王、政府、一院制の議会を国家権力の中心機関とする。農業者党の案も中央集権的な行政機構を基本にするが、政府案と異なって、各州ならびにその下位単位の郡にまで一定の自治権を認めていた。

社会民主党の案

社会民主党の案は、大土地所有と大企業の社会化を主張する点に特徴があった。すなわち、彼らは国家や地方政府の所有を除いて、大土地所有を認めず、これを農民に再分配すること、また大企業を国有化して国家の監督下に置くことを主張した。国家制度に関しては、社会民主党は、議会制をともなった共和制国家の樹立を求めた。また地方には一定の自治権を認めた。

ユーゴスラヴィア・クラブの案

ユーゴスラヴィア・クラブは、スロヴェニア人民党、クロアチア大衆党、ブニェパツ・ショカチ党（パチカ、バナート、スリエム、スラヴォニアに居住するクロアチア人ないしカトリック教徒を代表する組織）の統一会派であり、カトリックの聖職者の代表組織であった。彼らの案の特徴は、住民の宗教を基本に国土を6つの州に分割し、これに広範な自治権を与える点にあった。6つのうち3つは主としてカトリック教徒の州（メジウムーレを含むクロアチアおよびスラヴォニア、ボスニアおよびヘルツェゴヴィナを含むダルマチア、スロヴェニア）であり、3つは正教徒の州（マケドニアを含むセルビア、モンテネグロ、ヴォイヴォディナ、すなわちバナート、パチカおよびバラニャ）である。国家機構に関しては、国王、二院制の議会、政府を設置する。また各州には、地方政府と地方議会を設置する。地方政府および地方議会は中央政府の監督の下に一定の自治権を行使する。

クロアチア同盟の案

彼らの案の特徴は、連邦制に近い原則で立憲君主制の国家を組織しようとする点にあった。国土は第一次世界大戦前の状況を受け継いで、マケドニアを含むセルビア、モンテネグロ、ヴォイヴォディナ（バナート、パチカ、バラニャ）、ボスニアおよびヘルツェゴヴィナ、クロアチア・スラヴォニアおよびダルマチア、スロヴェニアの6つの州に分けられる。国家行政の事項と権限は共通機関と各州の機関の間で分割される。共通の機関は、国王、二院制の議会、中央政府である。州の機関は、州議会、州政府、州の首長たる総督である。中央政府の管轄下には、外交、軍隊、財政、貿易、郵便、交通がおかれる。中央政府と州政府との間で解決できない対立が生じた場合には、憲法裁判所が調停する。この憲法の変更には各州の同意が必要とされた。

- 21 そのため、当初86条だった憲法草案は、139条に増加した。
- 22 Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.104-105.
- 23 主として貧農層を代表する農業者党は、旧封建領主に対しては、他に収入源がなく、どうしても生活保護が必要な場合を除いて、土地収用に対する補償金をいっさい支払わないことを主張した。農業者党は政府がこれを認めれば政府案に賛成すると述べたが、パシッチはこの要求を拒否した。ただし農業者党の傘下にあったスロヴェニア農業者党に対しては、3月の内閣改造で農業相のポストを党幹部（イワン・プーツェリ）に与えることで、彼らのグループを与党の陣営に抱き込み、政府案への支持を取り付けた。以上、Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.100による。
- 24 *Ibid.*, p.10-102. なお土地改革をめぐるキリスト教徒借地農民の利害を代表していた農業者党の要求とイスラム教徒地主の利益を守ろうとするユーゴスラヴィア・ムスリム組織の要求とは相反し、政府が両方の要求を満足させることは不可能であった。むしろ、首相のパシッチのねらいは、両陣営と同時に交渉することで、相手方に別の交渉相手の存在を意識させ、双方からできるだけ多くの妥協を引き出すことにあった。この結果、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織との交渉では、実質的には将来の行政単位の設定面で譲歩を与えるだけで、彼らの協力を確保できた。
- 25 ユーゴスラヴィア・ムスリム組織がボスニア・ヘルツェゴヴィナの南スラヴ人のイスラム教徒の政治代表であるのに対して、ジェミイット党はコソヴォやサンジャク、マケドニアなど南セルビアのイスラム教徒の政治代表であり、支持者にはトルコ人を自称する人びとが多かった。憲法制定議会でのジェミイット党の議席は当初、8議席であった。しかし、憲法草案に対する支持の見返りに政府がユーゴスラヴィア・ムスリム組織に一定の譲歩を与えたのを見て、ジェミイット党の影響の下に急進党と民主党に所属する南セルビア選出のイスラム教徒議員12名が独立した行動を起こし、「南セルビアのムスリム」という統一会派を結成した。彼らは、ジェミイット党と連携して、イスラム教徒の宗教的・教育的自治の保証、地方行政機構や議会へのムスリム人の参加、マケドニア、コソヴォ、サンジャクのイスラム教徒地主の土地を土地改革の対象から外すこと、小作人から借地料を得ていない地主に補償金を与えること、キリスト教徒農民によって不法に奪われた土地を元の地主に返還させることを要求した (*ibid.*, p.103.)。
- 26 クロアチア同盟のマテ・ドリンコヴィッチは、憲法制定議会の演壇に立ち、国民クラブの名において、1918年10月29日のクロアチア議会の決議、1918年11月23日の国民評議会の決議、同日セルビア王国との国家統合の交渉のために国民評議会が作成した指針（「ナブタク」）を読み上げ、最後にこう述べた。
「…国民評議会代表団に託されたナブタクはクロアチア議会の決議に基づくものであり、国民評議会の上奏文とセルビア王国の摂政アレクサンダルが述べた答辞によって確定した国家統合を国民評議会が実現していく際の枠組みを示したものである。
憲法制定議会はこうした国家統合の経過を考慮しないばかりか、国家統合の基盤を破壊しようとしている。この議会は、クロアチア人代表の見地をまったく無視して、数の上での多数決によって国民に憲法を押し付けようとしている。国民クラブは、す

でに確定している方針に基づいて政府側が我々と協定に応じ多数決による憲法の決定方法を排除しない限り、この議会の合法性を否定し、クロアチアとクロアチア人に対して効力のある憲法を公布する権利を否定せざるを得ない。たとえ憲法が採択されたとしても、そのような憲法は無に等しく、まったく法的な効力が伴わないものであることをここに宣言する…」(Čulinović, *Jugoslavija između dva rata 1*, p.335-336)。

- 27 1921年5月、共産党議員団は政府に対して次の要求を出していた。(1)1920年12月に制定された共産党の活動を禁じた政令(「オブズナーナ」)の撤廃、(2)労働組合活動に対する規制の撤廃、(3)閉鎖されていた労働組合の寄宿舎の再開、(4)共産党系出版社の活動の再開、(5)逮捕・拘束されている労働組合員および共産党員の釈放と職場への復帰を認めること、(6)「オブズナーナ」によって労働組合と共産党が被った損害に対する補償。しかしながら、政府はこれらの要求にいっさい応じなかった。共産党は翌6月に再度同じ要求を突きつけたが、政府は門前払いにした。これに抗議するために、6月11日、共産党は議会のボイコットを決め、議会外での活動を宣言した(Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.107)。

- 28 同日、ユーゴスラヴィア・クラブは次のような声明を発表した。「…政府与党は今日に至ってもなお我々の見解に耳を貸さず、議員の多数決によって憲法を採択するという憲法制定議会の議事規程をそのままにしてきた。これによって、これはクロアチア人およびスロヴェニア人の多数が反対したとしても、多数派の民族の助けを借りて憲法を採択することが可能になった。…

中央集権制的な国家秩序の採用は国民と国家の結束を強化するどころか、弱体化させると我々は深く確信する。それがゆえに、我々は、国家の内部組織というこのもつとも微妙な問題を、我々の見解に沿って民族間の協議によって政府与党が解決することをこの間ずっと求めてきた。しかし、これまで十分な時間があつたにもかかわらず、政府与党は何もなさなかった。…

それゆえ、三民族(セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人)の一部の賛成によってのみ憲法が採択されることが確実になり、これ以上反対勢力として活動を続けても意味がないことが明らかになった。

したがって、ユーゴスラヴィア・クラブの議員は、国民および国家の結束を真に願う者として、このような憲法の採択に反対し、この憲法の採択が必然的に国民と国家にもたらす厄災に対する責任を負わないようにするため、抗議の意志を込めて、憲法草案の審議と採決が終わるまで、憲法制定議会を欠席する…」(Čulinović, *Jugoslavija između dva rata 1*, p.348)。

- 29 ユーゴスラヴィア・ムスリム組織は連立内閣の一翼を担っていたが、一時政権の離脱を表明した。事の発端は、1921年5月31日、急進党幹部のミラン・シュルスキッチの議会発言にあった。スルシュキッチは、土地改革に際して、旧封建領主には、一部の貧困層を除いて、補償金の支払いに反対する発言をした。ユーゴスラヴィア・ムスリム組織党首(JMO)のメフメド・スパホはこれを約束違反だとして、首相のパシッチに閣僚を辞することを告げた。急進党はスルシュキッチの発言を党の見解としないうことで、スパホは辞表を撤回したが、このあと、憲法の最終案の中にボスニア・ヘルツェゴヴィナの一体性を脅かすような規定があることを指摘し、政府に見直しを求め

- た。それは、州議会の5分の3の議員の賛成があり、国民議会が承認すれば、別の地域の州との合併ができるという規定であった (Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.108)。
- 30 このほかパシッチは、採決に際してのスロヴェニア農業者党議員の賛成を確実にするため、利益供与をおこなったとみられている。これをスクープで報道したのはサラエヴォの野党系の日刊紙『ナロード』であった。同紙は、憲法草案の採決の数日前、政府は支持の見返りとして、スロヴェニア農業者党の幹部のボグミール・ヴォシュニャクに対しては重要な外交官の地位を約束し、その他の議員に対してはオーストリアに自由に牛を輸出する許可を与え、この結果、政府は5000万ディナールで10票を買ったと報じた。実際、憲法が採択された数日後、ヴォシュニャクはブラハ駐在の大使に任命された (Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p.206)。
- 31 アレクサンダルの暗殺未遂事件では、犯人の共産党員に20年の禁固刑が言い渡され、共産党議員10名を含む33人が起訴され、2年から4年の禁固刑となった。内相ドラシュコヴィッチの暗殺事件では、暗殺の実行者に死刑、仲間の3人に15年の禁固刑、1人に2年の禁固刑の判決が下った。
- 32 正式名称は「公共の安全と国家の秩序を守る法律」。
- 33 Hrvoje Matković, *Povijest Hrvatske seljačke stranke*, Naklada Pavičić, Zagreb, 1999, p.95-96.
- 34 Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.118.
- 35 このころ、セルビアの政治指導者にとってステェパン・ラディッチは未知の政治家であり、パシッチらがプロティッチの行動を容認した背景には、ラディッチはどの程度話が通じる男なのかを知りたいという思惑もあった (Matković, *Povijest Hrvatske seljačke stranke*, p.98)。
- 36 Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p.216, Čulinović, *Jugoslavija između dva rata 1*, p.372.
- 37 以上の経緯は、Hrvoje Matković, Svetozar Pribičević: *ideolog-stranački vođa-emigrant*, Hrvatska Sveučilišna Naklada, Zagreb, 1995, p.93, による。
- 38 Branislav Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, Institut savremenu istoriju, Beograd, 1970, p.250.
- 39 Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 2*, p.221.
- 40 以上は主として、Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.253, による。少数民族の代表であったプリビーチェヴィッチはクロアチアでは、警察や軍事力を動員した強権政策をとらなければ権力を維持することができなかった。そのため民主党はクロアチアでは「鞭打ち刑の執行者」と揶揄されていた (ibid., p.254)。
- さらにいえば、ユーゴスラヴィア主義を標榜する民主党は、急進党とは異なって、結党当初、旧オーストリア＝ハンガリー領諸地域のクロアチア人やスロヴェニア人も入党していた。しかし、彼らの中からはその後、プリビーチェヴィッチの硬直した中央集権主義と強権主義政策に異議を唱えて民主党を離党する者が多数出た。党首のダヴィドヴィッチは、これ以上離党者を出さないようにするためにも、プリビーチェ

- ヴィッチ派の力を抑え、党の路線を修正する必要があった (ibid., p.258)。
- 41 ヘルツィゴーニャは戦前に諜報機関に属していた人物であり、この金銭は戦前の国家に対する功労に対する報奨として与えられたものであった。機関誌の指摘によれば、暗殺事件のあと、ヘルツィゴーニャは国外に逃亡したが、これには先の金銭的報奨が発覚しないように意図的に逃走の機会が与えられた形跡があった。このことはドラシュコヴィッチ暗殺の背景には結果的にプリビーチェヴィッチが関係していたことを意味し、それゆえ、プロティッチは、プリビーチェヴィッチには道義的責任があることを提起したのである (Horvat, *Politička Povijest Hrvatke 2*, p.218.)。この事件に関しては急進党の思惑どおりに、後に民主党の内部からもプリビーチェヴィッチの責任を問う声が上がった。たとえば、ヴォヤ・マリコヴィッチは党の総務会でこの問題を採り上げ、プリビーチェヴィッチの閣僚辞任を要求した (Ibid., p.225)。
- 42 民主党は、1917年3月のテッサロニキ裁判で有罪となったツルナ・ルーカ (黒い手) 派の将校の恩赦と国防相のゼツエヴィッチ將軍の更迭を求めた (Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.119)。ツルナ・ルーカは青年将校を主体に結成された秘密結社であり、1903年に国王アレクサンダル・オブレンオヴィッチとその妻の殺害を実行した。彼らはジュネーブに亡命していたペータル・カラジョルジェヴィッチを国王に迎え入れた。しかし、ペタルの息子の摂政アレクサンダルは、軍部の中でツルナ・ルーカの影響が高まったことに反感を持ち、第一次世界大戦の最中にその指導者を逮捕し、テッサロニキで軍法会議にかけた。ダヴィドヴィッチらセルビアの野党勢力はかねてからこれを冤罪裁判として強く批判していた。
- 43 Matković, Svetozar Pribičević: ideolog-stranački vođa-emigrant, p.94, Gligorijević, *Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929*, p.119.
- 44 Horvat, *Politička Povijest Hrvatke 2*, p.224.
- 45 Ibid., p.225.
- 46 Ibid., p.225. なおプリビーチェヴィッチ派は、イタリアのファシスト党が作った親衛隊をまねて、オルユナ (Orjuna=ユーゴスラヴィア愛国組織) と呼ばれる党所属の親衛隊を組織した。これとの対抗で、ハナオ (Hanao=クロアチア国民青年)、スルナオ (Srnao=セルビア愛国組織) と呼ばれる団体が出現し、相互の小競り合いはときとして内戦の様相を呈したといわれる (Ibid., p.226)。
- 47 「覚え書き」のテキストはHorvat, *Politička Povijest Hrvatke 2*, p.226-228、に掲載されている。なお「覚え書き」はその後二度書き直されて、そのトーンもずっと控えめになった。
- 48 法律の成立には国王の署名が必要であったが、国王は婚約のためルーマニアに滞在中であり、政府が代理で署名をおこなった。なおこの法律の賛否をめぐる、ユーゴスラヴィア・ムスリム組織は分裂することになった。
- 49 Ibid., p.236-237.
- 50 Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.260-261. なおこれに対抗して、プリビーチェヴィッチも自らザグレブに行き、その支持者を集めて櫓を飛ばしダヴィドヴィッチのもくろみをくじこうとした

(*ibid.*, p.261)。

- 51 *Ibid.*, p.269. 興味深いのは、この会議はとくに事前に定められた議題はなく、セルビア人とクロアチア人の相互理解を深めるために、会議に出席していたクロアチア人に「クロアチア人の考えと気持ちを語ってもらおう」ことで始められたことである。二人のクロアチア人がこの役目を引き受けた。一人は、民主党ダヴィドヴィッチ派のトミスラヴ・トムリエノヴィッチであり、もう一人はすでに民主党を離党したジヴァン・ベトリッチであった。

トムリエノヴィッチはセルビア人とクロアチア人の関係がこれほど危機的に悪化した原因をこう語った。彼によれば、セルビア人は最初から征服者のような態度をとったので、クロアチア人は防衛的態度をとらざるをえなかった。彼らがクロアチア人に対する態度には、セルビアの政治的風土や歴史的伝統の影響を見て取ることができる。旧オーストリア＝ハンガリー領出身のセルビア人（プリビーチェヴィッチ・グループ）は極端に反クロアチア政策をとってきたため、クロアチア人とセルビア人の関係はいつそう悪化した。彼らのおかげで、(旧オーストリア＝ハンガリー領出身のセルビア人だけでなく)セルビア人一般がこのような仕打ちを望んでいるとクロアチア人は思いこみ始めた。そこから「民族間の争い」が発生し、それは「国家的規模の争い」に発展した。

トムリエノヴィッチは、クロアチア人の感情を推量して、こう強調した。政治的、行政的な弾圧政策によって、かえってクロアチア人の民族意識が強まり、広がりを見せている。これに反して、王国に対する忠誠とユーゴスラヴィアの理念はどんどん弱まっている。以前はユーゴスラヴィアの理念に献身的であった人びとの間でもこの傾向は顕著である。このような状況のもとで、クロアチア・ブロックのメンバーは固く団結し、「セルビア人の勝手は許さない」という強い態度を示して、セルビア人に対する防衛的な志向が強くなったクロアチア人農民の支持を獲得した。クロアチア・ブロックの最低限の要求は、クロアチアの伝統的な国権に基づく独立性が何らかの形で実現されることであり、その場合には彼らは政権との協定に応じるつもりである。

元民主党員のジヴァン・ベトリッチは、クロアチアの政治的状況をトムリエノヴィッチよりも危機的に見つめていた。彼は、クロアチア問題とその解決策について、クロアチア・ブロックがどのように考えているとみられるかを、会議のメンバーにこう語った。

ベトリッチによれば、クロアチア人の最大の不満の種はセルビアの覇権主義（ヘゲモニー）的態度にある。セルビア人は、行政、外交、軍隊など国家機構のすべての重要な地位を独占する一方で、クロアチア人はこの国家の中では「二級市民」のような扱いを受けている。だから、この国家は「セルビア人の国家」だとクロアチア人は思いこみ始めた。そこで（クロアチア人の権利を主張する）クロアチア・ブロックの活動は民衆の支持を獲得し、彼らの地位は強固になった。しかしながら、クロアチア・ブロックは全体として、またラディッチ自身も、中央集権主義の緩和と自治権の拡大の上に立って、セルビア人との合同国家の形成を望んでいる。彼らが望む国家は、最終的には連邦制または国家連合的な国制をとる国家である。クロアチア・ブロックは、（旧オーストリア＝ハンガリーからクロアチア国家の独立をクロアチア議会が宣言し

た) 1918年10月29日以降に成立した協定や法制をすべて無効にし、セルビア人とクロアチア人との民族間交渉を最初からやり直すことを求めている。

ベトリッチの考えでは、次の選挙が実施されるまでは、クロアチア・ブロックとの合意は無理だろうということであった。しかし、会議の参加者の興味を引いたのは次の発言である。クロアチア・ブロックは、ベオグラードに向かうための機会と仲介者を求めている。ラディッチとクロアチア・ブロックがベオグラードに来ればただちに選挙が告示されるだろうが、現状では彼らは議会に参加することはできない。なぜなら、それは国家の現状を認めることになるからだ。しかし、ラディッチは、セルビア人が選挙のあと国制の再編に向けてイニシアチブをとってくれるのを待っている。彼はそれまで現在の方針を堅持し、クロアチア人の意向を満たしてよいという立場からクロアチア人と交渉する意思のある有力なセルビア人政治集団が現れるのを待っている。

ベトリッチの報告は、部分的にせよクロアチア・ブロックの見解をよく伝えていた。しかし、会議の出席者のほとんどは単一の国民国家を擁護する見解をもっていたので、ベトリッチの見方を討論の前提にすることはできず、むしろクロアチア・ブロックの「分離主義活動」を批判するような意見を多く述べた。もともと、別の方向での解決策を求める意見があった。セルビアの著名な地理学・民族学者であるヨワン・ツヴィイッチはこう尋ねた。「少なくとも三分の一のクロアチア人から同意を獲得して、協定を結ぶ方法はないか」。ベトリッチはこう答えた。ありうるすれば、それは、セルビア人とクロアチア人が連合市民政党建成するか、クロアチア人に恩恵をもたらすような政権交代がおこなわれることだ。

今後の行動に関しては、会議の出席者からは、似かよった綱領をもった既存の政党を一つにまとめようとの提案があった。そのためには、クロアチア・ブロックの一部（おそらくクロアチア同盟をさす）を、ラディッチ、つまりクロアチア共和農民党から引き離すことが緊急に必要なということになった。以上、ibid., p.269-271、による。

52 Horvat, *Politička Povijest Hrvatske* 2, p.238.

53 Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca*, p.273.

54 Ibid., p.275.

55 Ibid., p.277.

56 Ibid., p.278.

57 Ibid., p.278-279.

58 Ibid., p.276.

59 Ibid., p.280.

60 Ibid., p.288.

61 国家統合時に皇太子で摂政を務めていたアレクサンダルは、1921年8月、父親のペータル1世の死により、王位を継承した。

62 Ibid., p.289-290.

63 以上は、Matković, *Svetozar Pribičević: ideolog-stranački vođa-emigrant*, p.102, Gligorijević, *Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i*

Slovenaca, p.292-293、による。

- 64 Matković, Svetozar Pribičević: ideolog-stranački vođa-emigrant, p.103. なおこの会議の決議によって、「党総務会と議員クラブが決定を下すまで閣僚の仕事はできない」と表明してプリビーチェヴィッチ派の閣僚が出していた辞表も撤回されたと考えられる。
- 65 Ibid., p.103.
- 66 Gligorijević, Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.293.
- 67 Matković, Svetozar Pribičević: ideolog-stranački vođa-emigrant, p.103.
- 68 Gligorijević, Demokratka stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.294-295.
- 69 Ibid., p.296.
- 70 グロルとミハイロヴィッチは、セルビアの世論とダヴィドヴィッチの情勢判断を、クロアチア・ブロック代表に詳しく説明した。彼らによれば、パシッチ政権に対する不満はセルビアの民衆の間にも広まっている。他方、セルビア人は、どうしてクロアチア人がセルビア人を敵のように考えているのか理解できないし、どうしてクロアチア人が議会に出席してその要求をはっきりと述べ、兄弟民族として話し合いで問題を解決しようとしぬのか理解できないでいる。セルビア人はクロアチア人が考えるような意味での君主制主義者ではない。セルビア人が国王を支持するのは、国王が権力と統一の象徴であるからだ。セルビア人は憲法を支持しているが、これは市民的権利の保障を憲法の中に見いだしているからであり、この憲法に支障がある場合にはただちにこれを見直す用意がある。ただその際、大きな緊張や衝突が起きるのを避けたいだけだ。グロルとミハイロヴィッチは、セルビアの覇権主義についても言及した。セルビアの覇権主義の起源はセルビアの国家観念（＝大セルビア国家の樹立）にあり、急進党はこれにとらわれている。これに対して、我々ダヴィドヴィッチ・グループはクロアチア人が協定を結ぶには都合がよい相手である。我々はこのような国家観念にとらわれていないし、クロアチアにこのような国家観念を持ち込むつもりはない。むしろ、我々はクロアチアに一定の自治権を認める立場である。グロルとミハイロヴィッチは、クロアチア・ブロックの議員が議会に現れれば現在の政権は必ず崩壊する、国王の反対は心配に及ばないと、ラディッチの懸念を懸命に払拭しようとした。以上、ibid., p.298、による。
- 71 Ibid., p.299.
- 72 Ibid., p.299.
- 73 Ibid., p.301.
- 74 この直前に、ラディッチは、セルビア世論の懸念の払拭をねらって、旧セルビア王国のセルビア人に向けて次のようなメッセージを送った。「クロアチア・ブロックが第一に要求するのは、現行の政権の交代と選挙の告示であるが、これは現行のパシッチとプリビーチェヴィッチの政権がセルビア世論の支持を失っているためだ。セルビア人とクロアチア人が協定に向かうためには何よりも自由な選挙が必要だ」(Horvat, Politička Povijest Hrvatske 2, p.242)